

## 編 集 後 記

初冬の候を迎えるにあたり，はじめに本誌の読者の方々のご健勝を祈念致します．さて本号も編集委員の先生方の毎月の大変なる査読努力のおかげで原著 2 編，症例報告 10 編が掲載されました．掲載された論文の筆者らの満足感と達成感を十分に感じられます．以前にも記述しましたが本誌ではまず投稿原稿 1 回目で採用される論文はありません．編集委員会と筆者とのキャッチボールの繰り返しで，より質の高い論文に仕上げていくのが編集委員の役目であり，職務と自負している点から，査読論文が掲載された時は編集委員にもその喜びが伝わります．月に 2 ～ 3 回，秘書がにこにこしながら査読論文の入った黒猫宅急便を自室に持ってきます．今月は 10 編以上かなと思いながら編集委員会の直前まで査読には入りません．このため小生の方式では月のうち 1 回の土日は査読のために大学に泊まり込みになります．

現在 3 人で 5 組の査読委員体制ですが，嬉しいことに今度は 9 組体制になるとのこと，さらに本誌ほどの質の高い論文が邦文のために評価されないとの観点から嶋田理事，佐治委員長のご努力で Digestive Surgery と Collaboration の交渉が進行中とのこと，本学会の会員の投稿の増加が期待されます．

最後に小生が査読時に常に不満を感じることは症例報告で，“筆者らが検索しえたかぎりでは”という文献検索の表現の仕方です．

現在の IT 時代では通用しない言葉であり，若い投稿者への注意を喚起したい．

休日の am2 : 50 にこの文章を書いているのが，編集委員の実体です．

( 神津照雄 )